

## 平成30年 第9回教育委員会会議

### 1 日 時

平成30年7月4日（水）

開会 10時00分

閉会 11時13分

### 2 場 所

教育委員会室

### 3 出席者

田中新太郎教育長、金田清委員、横山真紀委員、眞鍋知子委員、西川恒明委員  
新家久司委員

### 4 説明のため出席した職員

新屋長二郎教育参事、藤村一志教育次長、升屋和夫教育次長、堀田葉子教育次長、  
近岡守教育次長兼保健体育課長、岡崎裕介庶務課長、杉中達夫教職員課長、  
塩田憲司学校指導課長、篠原恵美子生涯学習課長、田村彰英文化財課長

### 5 議案件名及び採決の結果

議案第18号 平成31～32年度使用中学校用教科書石川県教科用図書選定資料  
について（原案可決）

議案第19号 平成31年度用一般図書選定資料について（原案可決）

### 6 報告案件

報告第1号 平成30年3月石川県公立高等学校卒業者の進路状況について

報告第2号 平成30年度基礎学力調査結果の概要について

報告第3号 平成31年度石川県公立高等学校入学者選抜方法について

### 7 審議の概要

#### ・開会宣告

田中教育長が開会を告げる。

#### ・会議の公開・非公開の決定

議案第18号及び議案第19号は教科書採択に関する案件のため、地方教育行政  
の組織及び運営に関する法律第14条第7項に基づき非公開とすることを、全会  
一致で決定。

#### ・質疑要旨

以下のとおり。

報告第1号 平成30年3月石川県公立高等学校卒業者の進路状況について  
(塩田学校指導課長説明)

それでは、「平成30年3月石川県公立高等学校卒業者の進路状況」について、ご報告をいたします。資料の3ページをご覧ください。

初めに全日制課程についてですが、卒業者は7330名で、前年より346名の減少となっております。うち、大学・短大進学者は3897名で、卒業者全体に対する割合は53.2%、前年より0.5ポイント増加しております。なお、国公立大学への進学者は1419名で、卒業者全体の19.4%となっており、前年より0.9ポイント増加しております。今年度は、特に県内大学への進学者の割合が増加しております。

一方、就職につきましては1833名と、卒業者全体に対する割合は25.0%で前年より0.7ポイントとやや減少しましたが、この割合は近年では昨年、一昨年に次ぐ高い値となっており、好景気により求人数が安定して高い状況が続いていることによるものと考えております。なお、就職した生徒全体に占める県内就職の割合は昨年度と同じ割合となっております。

次に、定時制課程についてですが、卒業者は119名で、前年より9名減少となっております。大学進学者については1名増加、短大進学者は2名増加、専修学校等への入学者は5名減少、就職者は5名減少となっております。

続いて、通信制課程についてですが、卒業者は89名で、前年より10名減となっております。大学進学者については10名減少、専修学校等への入学者は5名増加、就職者は1名減少となっております。この春の卒業生は、早い段階から将来就きたい仕事ははっきりしている生徒が多く、資格取得等のため、専修学校等への進学者が増加したと聞いております。

以上、簡単にまとめますと、進学につきましては、全日制課程では、短大に比べ4年制大学進学者の割合が増加しています。また、卒業生の数は小さいですが、定時制課程では大学および短大進学者の割合が増加、通信制課程では専修学校等の進学者の割合が増加したことが今年の特徴でございます。就職につきましては、3月末の就職内定率が99.8%と、8年連続で99%台の結果となったところです。これは、生徒や学校教職員の頑張りはもちろんですが、多くの関係機関にも協力を頂き、連携による支援策の成果と考えております。

全日制、定時制、通信制のいずれの学校におきましても、生徒、保護者の希望に応えるべく、学習指導や進路指導に力を尽くしているところではありますが、県教委としては、今後も、生徒が主体的に進路を選択し適切な職業観・勤労観を育成するなど、キャリア教育の充実を図り、関係機関との連携・協力を進め、学校の支援に努めてまいりたいと考えております。

以上で、平成30年3月石川県公立高等学校卒業者の進路状況についての説明を終わります。

**【質疑】**

(眞鍋委員)

進路状況について、就職者については、「うち県内」という数字がありますけれども、大学・短大進学者の「うち県内」というデータがあれば教えていただけますか。

(塩田学校指導課長)

石川県内の四年制大学の進学者数の割合ということでございますが、今春卒の卒業者に占める県内大学の卒業生数の割合は 23.2%というふうになっております。

(眞鍋委員)

質問の意図といたしましては、今、国の政策でもなるべく首都圏への若者の流出を防ぐような政策が取られておりますので、県内の状況が知りたいなと思ってお聞きしました。

(田中教育長)

県内への大学への入学者と、県外への入学者の割合が、ここ何年かどんなふうに推移しているかは分かりますか。

(塩田学校指導課長)

県内の割合は、今年は率で言うと上がっております。特に今年の傾向としましては、県内に公立の小松大学ができた関係がございまして、そこへの進学者が増えた結果、県内の国公立の数も増えています。

(田中教育長)

率で言うと。

(塩田学校指導課長)

どの率ですか。

(田中教育長)

その進学者に占める県外・県内の大学に出た割合についてで、例えば四年制では、四年制進学者が何人いて、そのうち県内の大学へ何人行ってということですか。

(塩田学校指導課長)

四年制大学の進学者数は、数字で言いますと 3477 人という数字になっているのですが、そのうち県内の大学進学者の割合は 49.4%となっております。

(田中教育長)

前年と比較すると。

(塩田学校指導課長)

前年度は 46.2%ですので、大体 3 ポイント近く多くなっているということでございます。

(田中教育長)

その原因が小松大学の新設が影響しているのかと見ているということですね。

(塩田学校指導課長)

もともと地元志向が強いという傾向はここ近年出ておりますが、特に今年度は新しく開学したということが影響しているというふうに考えております。

(田中教育長)

よろしゅうございますか。

(眞鍋委員)

はい。分かりました。

(田中教育長)

これがずっと続けばいいのですけれど。問題は入ったのはいいのですけれど、今度は卒業するときに県内就職という話になるので、まずはパイを増やすというところではいい方向かなと思っています。

就職者の割合がちょっと減ったので、調べたのですけれど、去年、おとしぐらいからぼんと上がって、去年も高く、今年はちょっと下がったけれど、この3年間ずっと高めで出ていまして、その前よりは割合で言いますとだいぶポイントが上がっているものですから、やはり売り手市場の状況が続いている中で就職者もここ3年ぐらい割合が結構高い。今回特にそんな中で、短大から四年制へのシフトがちょっと見えました。よく見てみますと、一番顕著なのが、これは年によって違うので何とも言えないのですけれど、商業高校に通う女子生徒の短大進学が減って、四年制の進学が去年と比べてちょっと極端に増えているというのが、今回の例です。ただ、これが来年以降も続くかは分かりませんが、今年度ちょっと見てみると、そこが数字にちょっと影響しているのかなと。

あと定時制・通信制は分母が小さいものですから、年年でこの率は意外と動くものですから、一定の傾向があれば何かご説明しますけれど、年年でだいぶ動くものですから、傾向的な説明はなかなか申し上げられませんが。よろしゅうございますか。

(各委員)

はい。

それでは、「平成30年度基礎学力調査」について、結果の概要を報告いたします。

4ページをご覧ください。まず、1の「調査の目的」につきましては、主に、本県児童生徒の基礎的・基本的な知識・技能や活用力の定着状況を把握・分析し、課題を明らかにして、学校における児童生徒への指導の改善に役立てるためでございます。2の「調査の対象」ですが、「(1) 児童生徒に対する調査」のうち、「教科に関する調査」の実施校数、実施児童生徒数については記載のとおりでございます。対象教科等について、小4は、国語、算数、小6は、社会、中3は、社会、英語を対象教科とし、小6、中3については、例年同じ時期に実施される全国調査と重ならない教科を実施することとしております。なお、調査の集計・分析については、各学校の対象学年から無作為に1学級ずつを抽出して行っております。また、児童生徒の質問紙調査については、記載のとおりでございます。

(2)の「教員に対する調査」については、例年どおり、指導状況等について抽出での調査を行いました。実施校数等については、記載のとおりでございます。

5ページをご覧ください。3の「調査の日時」については、記載のとおりです。それでは、調査結果の概要について説明いたします。「4 調査結果の概要」の「(1) 教科に関する調査結果」をご覧ください。まず、出題につきましては、例年、基礎的・基本的な事項を問う設問と活用力を問う設問で構成をしております。基礎的・基本的な事項につきましては、例年、同レベル程度の問題を継続的に出題することとしています。活用力を問う問題につきましては、引き続き改善が必要なものは、継続して類似の問題を出題して、その改善状況を見るとともに、改善が図られてきているものについては、設問の質を上げることで難易度を上げ、より深い思考が必要なものとし、新たな課題が見つけられるよう工夫に努めております。

各学年・各教科の平均正答率につきましては、小4国語は、61.7%、小4算数は、75.1%、小6社会は、64.4%、中3社会は、62.7%、中3英語は、53.9%という結果でありました。

基礎的・基本的な事項の調査結果につきましては、各学年・各教科とも概ね安定した結果であり、基礎学力については、概ね、例年と同程度の定着が見られると判断しております。

活用力を問う調査結果につきましては、昨年度までと比較して改善が図られているようなものもありましたが、先ほども触れましたように、設問の難易度を上げたことによって、新たな課題が見えてきたものもありました。このことが、今回の正答率に影響を与えたと考えております。

それでは、各教科について、簡単に触れたいと思います。小4の国語では、「話すことと聞くこと」の領域におきまして、設問の場面設定の難易度を上げております。設問の文章において、4人の登場人物による話し合いの場面とし、文章量を増やした結果、解答する児童は、複数の内容を整理し、設問の題意に適切に答える必要が生じたことから、前年度から10.6ポイント低下したと捉えています。こうした新たな課題も見えてきましたので、今回の結果を踏まえ、引き続き改善に努めていきたいと考えています。

小4の算数につきましては、基礎的・基本的な事項について良好な結果であったことに加え、昨年度課題が見られた除法の式の意味理解においても、正答率が上昇し、改善

が図られていると捉えています。

小6および中3の社会につきましては、複数の資料を関連付けて考察し、表現することには、引き続き課題が見られることから、次年度以降も調査を継続して改善を図っていきたいと考えています。

中3の英語では、リスニング問題において、聞き取る情報を単文レベルから複数の英文を聞いて把握する設定にするなど、聞き取る情報量を増やしたことで、生徒は、昨年度よりも多くの情報の中から、必要な情報を整理し、設問に適切に答える必要が生じたことから、前年度から6.0ポイント低下したと考えています。英語を聞く力につきましては、新学習指導要領においても、今後ますます求められていくものであり、今回の結果を踏まえ、引き続き改善に努めていきたいと考えております。今後も、こうした調査結果を踏まえ、引き続き、基礎・基本の定着を継続的に見ていくとともに、活用力を問う問題を通して、必要な課題を明らかにして、学校の授業改善に生かしていくことが必要であると考えております。

具体的には、今月に結果の概要についてまとめた冊子を各学校に配付するとともに、指導主事会議等において、各教科の課題等についての共通理解を図り、9月以降の学校での指導助言に生かしてまいりたいと思います。また、その分析の結果や改善のための具体的な指導事例をまとめた報告書「分析・考察」を作成いたしまして、10月中をめどに、全国の学力調査の結果の概要とともに各学校へ配付することとしております。以上でございます。

次に、6 ページをご覧ください。「(2) 質問紙調査結果」について幾つか抜粋して、説明をいたしたいと思います。小学校第4学年の回答状況です。昨年度と同時期の教育委員会会議で取り上げた同じ項目で比較しますと、まず「自尊意識・規範意識等に関すること」のうち、「自分には、よいところがある」については、「あてはまる」「どちらかといえば当てはまる」と肯定的に回答した児童の割合は、78.5%であります。ここ数年の数値を見てみますと、肯定的な意見の割合は、80%前後を推移しており、今年度も同様な傾向であると捉えています。しかしながら、否定的に回答した児童の割合が2割近くいるということを課題と捉える必要があります。今後も、自尊意識や自己有用感の醸成に視点をおいた指導が大切であると考えております。

次に、「学習に対する関心・意欲・態度」のうち、「自分で計画を立てて勉強している」につきましては、「している」「どちらかといえばしている」と肯定的に回答した児童の割合は、72.6%であります。ここ数年の数値を見てみますと、肯定的な意見の割合は、72~75%を推移しており、今年度も同様な傾向であると捉えております。家庭での学習の在り方への指導にも配慮が必要と考えているところでございます。以上が、小学校4年生の回答状況です。

小学校6年生と中学校3年生につきましては、国の調査結果と併せて報告をさせていただきます。

続いて、教員の質問紙調査結果についてです。こちらも昨年度と同様の項目で比較いたしますと、「教科等に関する指導」については、「児童生徒の発言の機会や活動の時間を確保して、学び合う場を設けている」の項目で、「よくしている」「している」と肯定的に回答した教員の割合は、小学校、中学校ともに、90%を超える状況であり、学び合う場を設定する意識が進んでいることがうかがえます。新学習指導要領で求められているアクティブラーニングに取り組む意識の現れとも言えますが、今後とも、「主体的・対

話的で深い学び」に実現に努めていきたいと考えております。以上が調査結果の概要であります。以上で説明を終わります。

【質疑】

(西川委員)

中3の英語の聞くことに関しての時間はどのくらいですか、例えば今年延びたとか。

(塩田学校指導課長)

時間の設定に変化はございませんが、先ほども言いましたように、今まではどちらかという単語を聞き取ったり、どこにどこの場所があるかという、そういうキーワードを捉える問題だったのですけれども、今年は複数の文章の中から必要なキーワードを自分で聞き取る力や、あるいは人間関係の状況を複数の文章から聞き取るというか、ちょっと設問の仕方を変えたものですから、時間の変更はございませんでしたけれども、結果的に難易度は上がっているということでございます。

(西川委員)

聞いていないので、何とも言えないのだけれど、複数の文章を聞き取ってその中からキーワードを探し出すということになると、以前のものよりやはり少し時間がかかるのではないかなという気はしたのですけれども、そんなに混乱はなかったですか。

(塩田学校指導課長)

特に実施した後、時間が足りないという話は聞いていませんが当然情報量を増やせば、限られた時間でありますと、流す速度が速くなったりということはありますので、来年度以降出題する際には、分量と時間についての兼ね合いは十分検討していきたいというふうには思います。

(田中教育長)

時間は同じですから、ちょっと複数の会話を入れたので、一人の人が長々としゃべる。ボリュームはそんなに変わっていないのですね。

(塩田学校指導課長)

はい。

(田中教育長)

だから、情報量が、中身が増えたという話ですよ。そこはまた今年の状況も見て来年の時間配分にはまたちょっと検討させていただきたいと思います。

今からこの辺が重要視されてくるので、今回ちょっと変えたものですから、ちょっとその辺の正答率が下がりましたがけれども、その力をどう付けていくかがこれからまさに先生方の指導の仕方、授業改善に向けてくる大事なところなのだろうと思います。

国語と英語が同じような傾向で、ちょっと内容を複雑にしたものですから、結果が正答率に簡単に出てきました。想定していました。これが少しでも安定して上昇傾向になるように指導をどう改善していくか、同じような傾向の問題を今後継続的に見ていって、

ちゃんと力が付いているかというのを見ていけば、新しい学習指導要領などにも対応していけるのかなという思いです。

(西川委員)

感想ですけれども、小学校も中学校も英語をやっていますけれど、どちらかというとなり表面的な会話というか、まとまった量を聞き取るという活動には、今は何校か見せてもらおうと、なっていないのかなというふうに、これからの課題ですけれども。

(田中教育長)

そうです。

(金田委員)

平均正答率が、去年から見たら下がっているということなのだけれども、課長、これは大体6割と見ていいのかな。この辺、度数分布というか、こういうことを踏まえて、難しさというのは、難易度というかな。

(田中教育長)

ちょっと過去の傾向を。

(塩田学校指導課長)

問題を設定する、こちら側の考え方で言うと、大体6~7割の間で平均正答率が入ればいいなというふうには思っています。実際今年の分布も見ましたが、確かに小学校の算数、平均点が高かったものについては、正規分布になっていますが、山はやはり当然高得点の方に動いています。

それから、小4の国語や小6の社会、中3の社会については大体正規分布になって出てきていますので、平均点の多少上下はありますが、大体分布としては、われわれが狙った分布が出てきているのではないかなというふうには思っています。

(金田委員)

大体ノーマルカーブを描いてきているということだね。

(塩田学校指導課長)

はい。

(金田委員)

算数はどうであれ、去年から見てもまだ1.3、問題の難易度はどうか分かりませんが、これはそのまま額面どおり受け取ってもいいということかな。

(田中教育長)

算数のこの正答率は、どのぐらいの推移なのですか。悪いとき、低いときはどのぐらいだったのですか。ずっと70台か。

(塩田学校指導課長)

算数につきましては、昨年が73%ぐらいで、その前が64%、その前が72%で、多少やはり70%を超えたり下がったりすることはありますが、どちらかといえば60の後半から70の前半ぐらいの推移をしているという結果であります。

(田中教育長)

個別の問題でちょっと年によって色が出る。全体の傾向というよりも、個別の作問で影響が出る場合があるということみたいです。私も同じことを聞きました。

(金田委員)

ああ、そう。教育長も。

(田中教育長)

過去60台だったこともあったそうなので、75だから力が付いたとは、言い切れません。

(新家委員)

基礎学力というテーマなのでお聞きするのですが、僕らは基礎学力というと理科がないので、この科目の中に、それはだから全国学力調査で理科をやっているからここに入れなかったという解釈ですね。

(田中教育長)

そうです。

(新家委員)

もう一つ、質問の方なのですけれども、調査の内容で生活習慣という言葉があるので、僕の言うのが生活習慣かよく分からないのですけれども、最近の若い子を見ていると、いい子は非常にいい子が多いのです。でも何か一つのことを諦めずにやり切る力みたいなものが、精神力みたいなものが何か足りない。それで就職してもある程度してしまうと離職が高くなるような感覚を持っているのです。ですから、そういう質問なりを生徒に投げ掛けるというの、ひとつ考えていただくとありがたいなというふうには思っています。ひとつ意見です。

(田中教育長)

その手の質問は何かありますか。「根気良く粘り強く何かやれていますか」みたいな話ですね。

(塩田学校指導課長)

そうですね。先ほど表に出しました「自分で計画を立てて勉強している」というところもそういったところにもつながっていているというふうには思いますし、そうですね。あとは「物事を最後までやり遂げてうれしかったことがある」とか、そういう質問も設けております。この質問に関しては、例えば小4の結果ですと、肯定的に答えてい

る生徒の割合は 90%を超えております。近年の傾向を見ましても、ほぼ 9 割以上の生徒がそういうふうに前向きな回答はしております。

(田中教育長)

多分中学高校と上がっていくにつれて下がっていくものなので、今度全国調査の中で、中学の子も出てきますので、そのときまたちょっと参考にデータをお示ししたいと思います。

(新家委員)

何か考えていただけでは。

(田中教育長)

はい。まさに今そこが問題なので。

(横山委員)

私の方から 6 ページの質問調査結果についての質問なのですが、上の「自分には良いところがある」、生徒の方は若干なのですが、良いところがあるよと、絶対に当てはまる、ちょっと白黒、グレーのないゾーンというか、白というふうにしている部分がちょっと下がりて来ていたりするというのが、引っ掛かったと思うのですね。ここは、今後の指導も恐らく毎年そんなに大きな差はない部分だと思うのですが、この下の「教科などに関する指導」の中学校の部分が、もう確実にやっているよと、学び合う場を設けているよという中学校の先生が 33%から 43.5%というふうにすごく急上昇している。この部分の背景や、これまでの推移みたいなものを教えていただけますか。

(田中教育長)

学校指導課長、どう捉えていますか。

(塩田学校指導課長)

はい。この部分にはご指摘のとおりでございまして、この調査結果が出てきたときに中学校のその部分がいわゆる一番良くしているという部分の数字が上がったことについて、われわれも注目をしました。これはわれわれが肯定的に捉えたとすれば、今まさに新しい学習指導要領に向けて、アクティブラーニングを推進するというのに、できるだけ授業の中に一方的な授業ではなくて、グループ活動であるとか自分の考えを発表するとか、そういった場面を入れていきたいと思いますということを学校全体挙げてやっている、そういった取り組みの成果が、学校の教員の意識に、そういうふうにつながっていくというふうに捉えています。ただ、これはあくまで意識ですので、あとはその結果がきちんと伴うようにしていくということが、またわれわれの仕事なのかなというふうには思っています。

(田中教育長)

授業を見ていますと、本当にアクティブラーニングさせているだけで、これが本当に設定する場面と内容としていいのかという授業が一部あります。そういうものはやはり

学校訪問の中でも気になるので、指導主事なども言っています。場面の設定がちょっとずれているのではないのと、もっと違う場面で、効果的な場面でやらないと、何でもかんでもグループ討議をさせて、考えさせればいいという話ではないので、そこはきめ細かくまた見ていきたいと思います。

ただ、やろうという意識は確実に上がっているというのがあります。

(横山委員)

そうですね。すごく明らかな。

(西川委員)

関連していいですか。

私も何校か見させてもらったけれど、確実に変わりつつあるね。やり方はまだまだ課題があると思いますけれども、教員の意識は変わりつつあるなど。単にこれはテストに出る、入試に出るから覚えておけという形からは脱却しつつあるなど思うし、先生方一人一人の必要感を感じながらやり始めているなどという感想はあります。後はやり方というか効率的な、本当に効果的なやり方というのは探っていかなければならないだろうなと思いますけれど。

(田中教育長)

多分うまくやって効果を上げている先生の事例を広げていって、こういう場面でこういう事業をやると非常に効果が上がっているよというのを、先生方で実感してもらえば一番早いのかな。好事例をうまく広げていくというのがいいのかなと今は思っていますけれど、そういう意味でモデル授業のようなものもやったり、あるいは学校の中でも見せ合ったり、授業を同じように見たりする。あるいは学年単位で工夫して、教科単位で工夫していく。そんな意識が高まれば、どんどん進んでいくのかなと期待しています。

(西川委員)

今言われたようなことで、指導方針が小・中・高・大とも大きく指導方法が変わっていくというのは、それは時代に合った形でいいのだと思うのだけれども、例えば大学もそうだし、小学校もそうだけれど、ある単元が終わったらやる、1時間終わった後、振り返りというような、これを今非常に入れているのですけれども、どうですかね。大事なことなので、そこをうまくこの振り返りということで検証していくというのは大事なので、それが形骸化して「楽しかった」「面白かった」と、そういうような形で、子どもも面倒くさがったり、先生もそこを通過していくようなことになってしまうと先ほどから課長が言っているアクティブラーニングも含めて、授業の根幹が崩れてしまうわけですね。指導の根幹が。だから、そういうところを文科省が言っている大事なのだと、確かに検証していく、事象を検証する、振り返りが大事なのは当然なのですけれども、そこに潜む危険性というものをやはり指導主事なり、現場の校長先生なりがきちっとやはり危険性をいつも把握していないと、そのまま真に受けて「楽しかった」「うれしかった」「面白かった」で通過してしまっただけで、後々しまったなということにならないように。今、教育長が言うとおりに、授業を見たとき非常にという、そういうときにきちん

とやはり伝えていきながら直していくというふうに、また振り返ってみるというようなことが大事なのではないかなという思いがするのです。

(田中教育長)

私もよく聞きましたけれども、教科書で教える内容は減っていないので、年間の授業実数は若干増えたというか、変わっていないので、アクティブラーニングばかりやっていたら、教科書が全部できないということになるので、まさにアクティブラーニングをやる場面なり、設問の時間の設定を効果的にやって、その時間でアクティブラーニングをやり、ある程度詰め込みとは言いませんが、知識をきちんと蓄積していく授業もやっていかないと、トータルでは力が付かないので、そことの兼ね合いがしばらく難しいかなということなので、そこは十分私どもも意識していますし指導主事も意識しています。安易に何でもさっき言いましたようにアクティブラーニングをやればよいという話ではないということをしっかりやっていかないと、別の意味で弊害も出てくる可能性があるので、そこはやはり学力調査なりこういう形の結果を見ながら、分析しながら指導法の改善に注意深く生かしていかないと、ただ旗を振ったらみんなそっちに行けというわけにはちょっといかないので、まさに中身の問題になってくるので、そこはしっかり分析もしながら注意深く進めていきたいとは思っています。

(西川委員)

お願いします。

(眞鍋委員)

自尊意識のところなのですけれども、「自分には良いところがある」という、この自己肯定感のようなものだと思うのですけれども、やはり事務局がおっしゃったように、2割以上の生徒がこういう意識が低いというのは、非常に気になるところです。以前ももしかしたら申し上げたかもしれないのですけれども、どの教科の成績とこういう結果との相関というか関連というか、そういうことを分析、多分この後されるのかどうか。その成績があまり芳しくないことによって、そういう感情、否定的な自己への感情があるのかどうかみたいなことを少しやはり探っていただいて、自己肯定感を上げるように教育指導というものをしていただきたいというふうに思います。

(田中教育長)

どうですか。授業と自己肯定感が密接に関連しているのか、あるいは学校生活、授業以外の面で、いろいろな意味で関連しているとか、前も眞鍋委員がおっしゃっていたと思いますけれど。

(塩田学校指導課長)

以前、成績とその自己肯定感は今の場合、自分にはよいところがあるのか。自分で計画を立てて勉強しているところと成績との関連性ですよね。そういったもののご指摘を以前の教育委員会会議で受けておりました。それで、今回、われわれの方でも教科別というところまでは今の時点では行けなかったのですが、全体の正答率と今回の表に挙げたアンケートのクロス集計というものをしてみました。そうしましたところ、やはり予

想通りと言えはそうなのかもしれませんが、上位 25%以上の生徒に対しましては、肯定的なパーセンテージが 85%、一方、下位 25%以下の生徒は 70%というふうにして、明らかにやはりそこに差がありますし、昨年度の結果を見ましても、昨年度につきましても同じようなやはり結果が出ていますので、やはり成績、学力という部分とそういう自尊感情あるいは計画性などといったものについてはある程度の相関があるということは考えられますので、その点も学校現場にお返しするときにしっかりと伝えていきたいというふうには思っているところです。

報告第3号 平成31年度石川県公立高等学校入学者選抜方法について  
(塩田学校指導課長説明)

それでは、「平成31年度公立高等学校入学者選抜方法について」、ご報告いたします。

資料の7ページをお開きください。初めに1の推薦入学について、ご説明いたします。まず、「(1) 推薦入学実施校」ですが、アに示しました全日制の普通科で推薦を実施するのは、昨年度同様、ご覧の8校であります。イに示しました全日制の普通科におけるコース、専門学科および総合学科で推薦を実施するのは、昨年度同様のご覧の21校ということでございます。また、ウに示しましたように、定時制における実施校はありません。

8 ページをご覧ください。「(2) 推薦入学の推薦枠及び検査科目」をご覧ください。先の教育委員会議でご審議を頂き、決定された入学者選抜方針では、推薦枠につきましては、コースを除く普通科は、20%以内、普通科におけるコース、専門学科および総合学科は、25%以内となっております。その選抜方針を受け、各学校において、志望動機がより明確で、適性、興味および関心がより高い者を選抜し、学校の活性化を目指して推薦枠を設定したものでございます。検査科目については、今年度より、県立工業高校の5学科、機械システム科、電気科、電子情報科、材料化学科、テキスタイル工学科が作文を取りやめることとしました。その理由としましては、これまで県内の工業高校において唯一作文を実施しておりましたが、近年、受検生間で作文の評価について大きな差異が生じておらず、選抜資料としての役割が小さくなったというふうに考えているということでございます。

次に、9 ページをご覧ください。「(3) 推薦要件」であります。アの「普通科の推薦入学」実施校につきましては、昨年度と同様となっております。県が定める推薦要件として、aの「推薦にふさわしい学力を有すること」、bの「当該高等学校が定める推薦要件を満たすこと」が入学者選抜方針で規定されており、それを受けて、推薦入学を実施する学校からの推薦要件を9ページから10ページにわたって示しておりますので、ご覧いただければというふうに思います。

10 ページをお開きください。イの「普通科におけるコース、専門学科及び総合学科における推薦入学」の実施校につきましては、県が定める推薦要件を、aの「志望する動機、理由が明確かつ適切であること」、bの「適性、興味及び関心を有すること」、cの「調査書に優れた点や長所の記録を有すること又は当該高等学校が定める推薦要件を満たすこと」と示してございます。このうち、cの「当該高等学校が定める推薦要件」については、定めている高校はありません。

次に、11 ページをご覧ください。2の一般入学についてです。「(1) 一般入学の学力検査以外の検査科目」について、全日制課程の学校、定時制課程の学校とも、それぞれ一覧表に記載されているとおりとなっております。今年度、小松市立高校・普通科・芸術コースが面接を取りやめることとしました。その理由としましては、受検生間で面接の評価について大きな差異が生じていないことその他、適性検査をより一層重視した選抜をしたいということでございました。次に、「(2) 傾斜配点実施校」は、昨年度同様ありません。

以上で、平成31年度石川県公立高等学校入学者選抜方法についての報告を終わります。

【質疑】

(金田委員)

難しい質問なのだけれども、能登の方と言ってもらってもいいし、加賀の方かな。いわゆる募集定員との関係で、この形態がやはり現場の学校長にしたら、やはり優秀な生徒をとという思いがやはり、かなり募定でいう定員を割ったところが多いわけですから、こういう中でのこの試験システムが形骸化していく恐れがないかどうかですね。

(田中教育長)

おっしゃることは分かるのですが、逆に言えば学校側としたら少しでもうちの学校をとという思いの強い生徒を早めに確保したいというのは、やはり常でございまして、その学校側の意識は変わっていないと思います。ただ、現実には、おっしゃるように子どもの数自体が減りまして、募集定員を確保できていない学校が多いということは事実でございますが、その中でもどうしてもこの学校にという子どもが事前にいけば、しっかりと選抜をして確保したいというところなので、確かに倍率が1倍を超えている学校で選抜という意味なら推薦というと非常に意味があるのだと思いますけれど、別の意味でまた定員割れしている学校は推薦入学の意義があるのだろうと思うので、いましばらくそこは様子を見たいと思っていますので、ご理解を頂きたいと思います。

(金田委員)

今教育長が言われましたように、現場がやはり校長および先生方がやはりこのシステムが要るのだと、そして優秀な生徒を、この学校で頑張る生徒が欲しいのだと、それを強く持っていないと、やはりアピール性がないと思うのですけれどね。分かりました。

(田中教育長)

言葉は悪いのですけれど、青田買いといえは青田買いですね。

(金田委員)

それでいい。

(田中教育長)

早めに中学校を回ってうちの学校に来ている子どもを確保したいという話になるので、その一つのツールと言ったら変な言い方ですけど。

(金田委員)

いいのではないか。それで。

(田中教育長)

推薦枠がありますのでという話は要るのだという話は、学校の先生方からよく聞きます。これがなくなってしまうと、受けてくださいというだけになってしまうので。

(金田委員)

どうしても、現場の強い、やはりシステムに対してほしいのだというものをアピールされていけばそれでいいと思います。

(横山委員)

11 ページの一般入学の4、小松市立の芸術が、面接を今回からなくしたという件なのですけれども、特にそれも恐らく芸術系や工業系の方というのは就職される方々もとても多い気がしています。それでこの面接ということで、中学校のときに面接のためにやはりちょっと一般教養的なことや、礼儀のようなことも教わった形で受験に挑まれると思うのですけれども、なぜなくしたかと、今聞いたことは聞いたのですが。

(田中教育長)

学校指導課長、小松市教委の考え方をもう少し詳しく。

(塩田学校指導課長)

少しお話を深く聞いたところ、結局、推薦で受けている子も、一般で受けている子もほぼ層が同じということで、推薦の方は面接ですとかそういったものを行っておりますので、本試験の方に来る子も一度は、ほとんどの子は面接を受けている。推薦を受けているような子が多いということで、結局同じ生徒を選抜しているということが実際には聞き取ることができました。

(田中教育長)

非常に現実的な話です。

(塩田学校指導課長)

はい。現実的な話ですが、そういうことでございます。

(横山委員)

なぜだろうと思った。

(田中教育長)

同じように、私も質問しましたので。でも、そういうお話だったみたいです。

(横山委員)

分かりました。

(田中教育長)

以降の審議は非公開となるため、傍聴人の退席を促す。

議案第 18 号 平成 31～32 年度使用中学校用教科書石川県教科用図書選定資料  
について

塩田学校指導課長が説明し、採決の結果、全会一致で原案のとおり可決された。

議案第 19 号 平成 31 年度用一般図書選定資料について

塩田学校指導課長が説明し、採決の結果、全会一致で原案のとおり可決された。

- ・ 閉会宣言

田中教育長が閉会を告げる。